

# 文化財 ニュース

23 Spring 2021

## 令和3年度テーマ展① 「宮本家歴史資料から見る 通過儀礼」

### ■期間

前期 令和3年4月20日(火)～6月20日(日)

後期 令和3年6月22日(火)～8月15日(日)

※休館日:5月17日(月)/6月21日(月)

### ■場所

日比谷図書文化館 常設展V室



【写真1】宮本家資料

令和2年度、千代田区教育委員会に寄贈された資料の中に、「宮本家歴史資料」があります。内容は、江戸時代中期から昭和初期にかけての宮本家の記録で、幕末に幕臣として、明治期には外交官として活躍した宮本お小一かす(1836～1916)に関するものなど多種多様な資料256点からなります。

今回は、数多くある資料の中から「宮本家歴史資料から見る通過儀礼」と題して、テーマ展を行います。前期では、宮本小一の誕生から成人に至るまでの資料を展示し、江戸時代の武士の通過儀礼について紹介します。後期では、明治・大正期の結納の資料を取り上げ、婚礼の儀礼について紹介します。

# 「宮本家歴史資料から見る通過儀礼」

## 宮本家歴史資料とは

宮本家歴史資料は、小一が残した家伝来の資料と明治以降の宮本家の人々の記録からなります。

宮本家は代々御家人の家系で、幕府に仕えていました。小一の父で宮本家7代目宮本久平(1814～1890)は、昌平坂学問所で学び、幕府の人材登用システムである学問吟味がくもんぎんみにおいて、最高ランクの甲科こうか及第きゅうだい(合格)となります。その後、甲府勤番士やその子弟の教育機関である甲府徽典館きょうふきでんくわんの学頭がくとうや御徒目付おかちめつけなどを歴任し、幕府終焉までの約40年近く実務官僚として勤めました。その息子宮本小一郎(明治に小一に改名)も父久平と同様に学問吟味で甲科及第となり、官僚の道に進みます。彼は軍艦操練所ぐんかんそうれんじょ調方出役かたしゆつやくとして幕府に出仕し、幕府と諸外国との交渉の窓口であった神奈川奉行の支配組頭を務めます。幕府終焉後は、外務省に出仕し、外交官としてロシアとの境界交渉や日朝修好条規の締結に携わりました。また、来日する外国の貴賓の応接にも当たりました。これらの功勞により、元老院議員きんげいのましご、錦鶏間祇候を任じられ、貴族院議員にも勅任されました。

宮本小一は外務省での勤務のかたわら、家伝来の古文書類の整理を始めます。明治14年(1881)7月

に「宮本氏記録」と命名した乾坤二巻の軸装を仕立て、大事な家の古文書類をこれに収録しました。その背景には、幕末から明治にかけての急激な社会の変革期において、旧幕臣だった家々の没落がありました。こうした状況を小一は直接目にしており、家の記録を残すことに努めました。

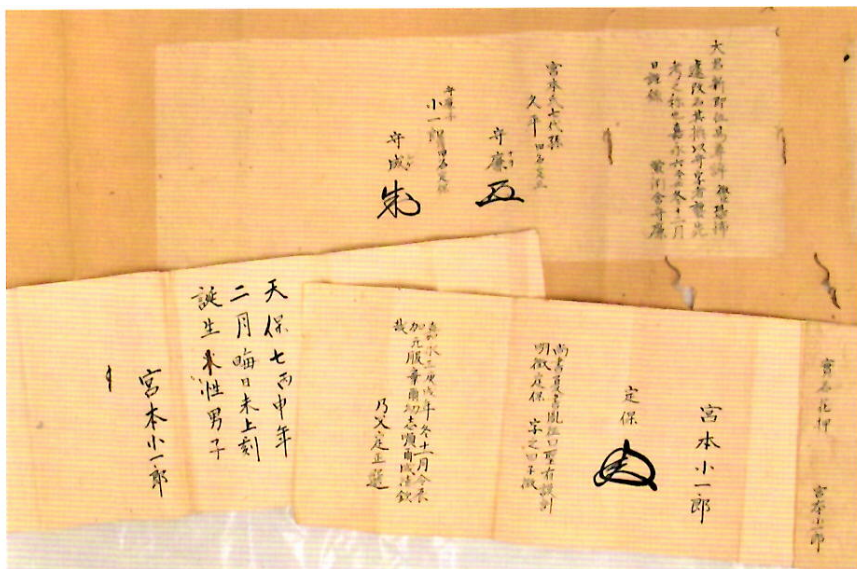


【写真2】「宮本氏記録 乾坤」



【写真3】宮本小一

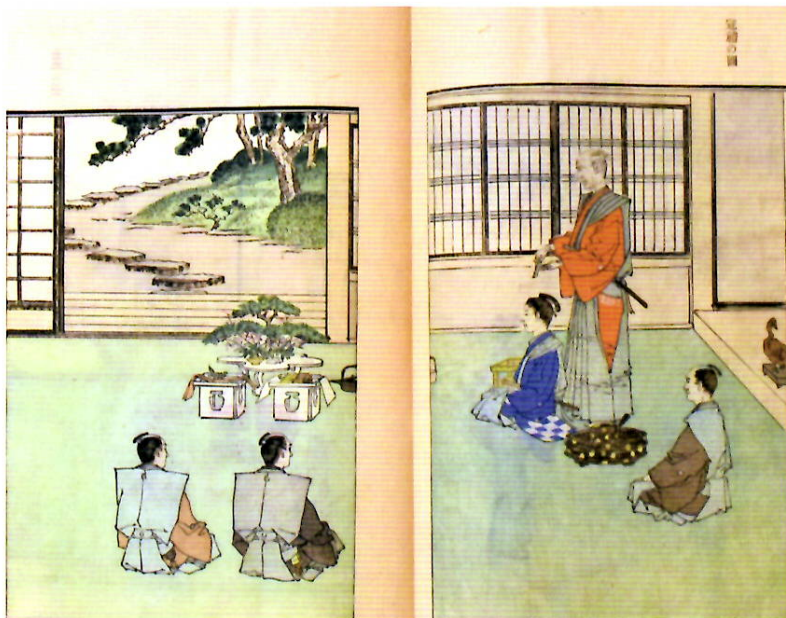
## 前期 武士の通過儀礼



【写真4】宮本小一の出生から元服までの記録

人が生まれて死ぬまでの一生の間に年齢や精神の成長にあわせてその節目ごとに行われる儀礼は、「通過儀礼」と呼ばれてきました。現在、七五三や成人式など子供の成長を祝う通過儀礼が行われています。こうした儀礼の形態や考え方は、時代の変化とともに姿を変えていきます。

江戸時代の武士階級においては、成長に合わせて名、衣装、髪型を変え、冠礼かんれいとも呼ばれる元服を迎えることにより一人前の成人として武家社会に認識されていました。



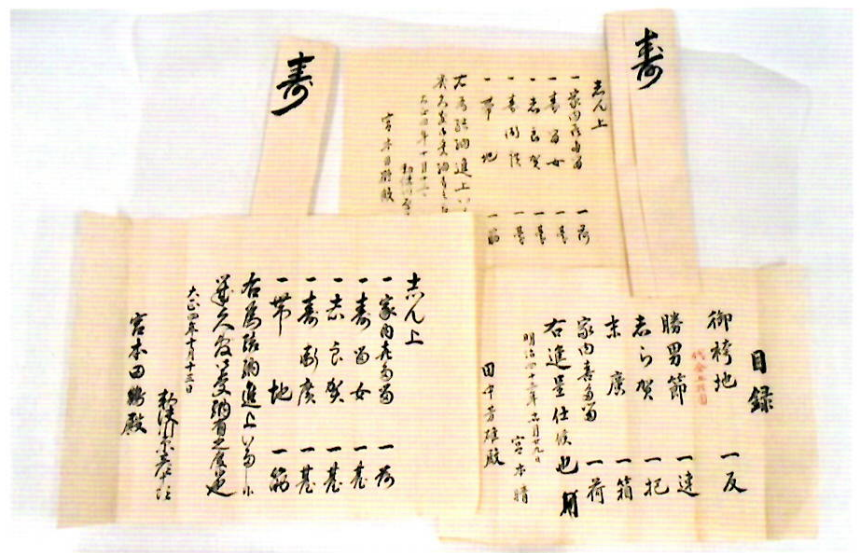
【写真5】冠礼（元服）の図  
 (参考資料『徳川盛世録』  
 (千代田区教育委員会所蔵) より)

宮本家歴史資料の中には、宮本小一の誕生から成人に至るまでの名命書や実名花押かおに関する資料が残されています。江戸時代の武士の誕生から成人までの通過儀礼や偏諱へんきといった、現在では失われている当時の慣習を知ることができます。

## 後期 明治・大正期の婚礼

婚礼は、①婚約、②結納、③結婚、④披露の各儀礼からなります。戦前において婚礼は「イエ」の継承を重視し、双方の親族や地域の人々に認められることが重要であると考えられてきました。高度経済成長期を迎えた昭和30年代以降には、社会的な繋がりを重視するようになり、当人たちの職場の上司や同僚・友人を招待した婚礼のスタイルへと変化していきます。

宮本家歴史資料の中には、明治・大正期に行われた宮本小一の娘たちの婚礼の際に、両家で交わされた結納に関する資料が残されています。最近では結納の儀礼自体が略式化され、行わない人も増えています。展示では両家で交わされた目録から、当時の結納品の内訳や各結納品の意味などを紹介します。



【写真6】宮本家の結納に関する記録

。人々の生活様式や価値感が多様化した現代社会では、通過儀礼をはじめとする伝統的な日本の慣習が失われつつあります。

今回のテーマ展を通して、通過儀礼の本来の役割や行うことの意義についてご覧いただき、古き良き日本の伝統を再考するきっかけとしていただければと思います。

(学芸員 白井拓朗)

# 五代目市村竹之丞と八代目市川團十郎の死絵



【図1】「五代目市村竹之丞の死絵」



【図2】「八代目市川團十郎の死絵」

令和2年度に千代田区教育委員会へ寄贈された新収蔵資料の中から、「死絵」と呼ばれる浮世絵2点を紹介します。

## 死絵とは

死絵とは、おもに有名な歌舞伎役者の訃報を伝えるために出版された浮世絵のことをいいます。役者の姿絵に没年月日や戒名、菩提寺、辞世の句などの情報が書き添えられているのが特徴で、幕末から明治時代中頃にかけて盛んに制作されました。死絵という字面からは不吉で恐ろしい絵を想像してしまいそうですが、当時「追善の絵」とも呼ばれたように、役者の冥福を祈るファンの気持ちも反映された浮世絵なのです。

## 五代目市川竹之丞の死絵

では、実際に作品を見てみましょう。【図1】は、江戸時代後期の立役の名優、五代目市村竹之丞(1812~51)

の死絵です。五代目竹之丞は、「和事」という優美な所作とせりふ回しが特徴の恋愛劇や、誠実な男性が苦悩しながらも大義のために悲劇的状况に立ち向かっていく「実事」を得意とする役者でした。その容姿は上品だったといい、本図では直線的で整った眉、黒目がちな丸い瞳、小さく収まりのよい口元という似顔で表しています【図3】。



【図3】 五代目竹之丞の似顔（図1の部分拡大図）

画面右上には、「嘉永四辛亥八月廿日／賢誉竹栄信士」「市村竹之丞／行年三十九歳」「本所おしあげ／大雲寺へ／葬す」とあり、五代目竹之丞が嘉永4年(1851)8月20日に亡くなったこと、本所押上の大雲寺(現在は江戸川区西瑞江に移転)に埋葬されたことなどが読み取れます。

さらに、死絵の特徴的な描写として、死をイメージさせるモチーフも描かれています。たとえば、五代目竹之丞が着ている水浅葱色の服は水袴みずあき ぎとみずかかしいって、当時の死装束、喪服として着用する袴でした。また、画面左の香炉も死絵定番の小道具で、同じ仏具、葬具である蓮華や数珠、白木位牌などもよく登場します。こうしたモチーフを描き添えることで、画面上の人物が既に他界していることを示しているのです。

## 八代目市川團十郎の死絵

【図2】は、江戸時代後期に絶大な人気を誇った八代目市川團十郎(1823~54)の死絵です。画中には「嘉永七甲寅八月六日／猿白院成清日田信士」「行年三十二歳」「武蔵野の／つちてそたてし花牡丹／浪花の土て／枯るくるしさ／三升」と書かれています。

先に見た五代目竹之丞の作例と異なり、画中に八代目團十郎の名前は見当たりません。しかし、その似顔や、辞世の句の作者として八代目の俳名さんじょう「三升」が記されていることから、描かれた人物が八代目だということが分かります。なお、八代目の持つ巻紙や画面上方の飾り模様には市川團十郎家の定紋である三升紋じょうもんがみ ますもんあしらわれており、制作者の芸の細かさが感じられます【図4・5】。

八代目團十郎の死絵は、本図も含めて実に100種類以上、出版されたといわれています。その背景には、八代目が美貌、才能、実力を兼ね備えた江戸随一の花形役者だったこと、くわえて公演先の大坂で理由不明の自刃を遂げるといふ衝撃的な最期を迎えたことがあります。世間で様々な憶測が飛び交うなか、その死を悼むファンやこのスキャンダルに興味を持った人たちの需要に応じて、八代目の死絵はバリエーション豊かに展開してきました。

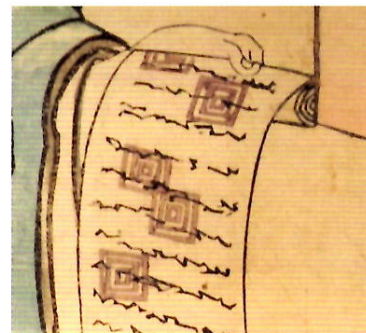
ところで、【図2】には一部誤った情報が掲載されています。実は、八代目團十郎の戒名は「猿白院成清日田信

士」ではなく、正しくは「篤誉浄蓮日忍信士」なのです。なぜこのようなことが起こったのでしょうか。

先述のとおり、八代目の自刃は世間を騒がせる大スキャンダルとなりました。この特ダネをつかんだ江戸の版元たちは、我先に報じようと死絵の出版を急いだことでしょう。しかし、遠い大坂の地から届く情報には限りがあり、見切り発車で制作を行うこともあったようです。その一例となるのが本図です。この八代目の誤った戒名が、父・七代目團十郎の俳名である白猿や屋号の成田屋を思い起こさせることから、版元が死絵の体裁を整えるためにそれらしい戒名を創作し、画面に記したものと推測されています。本図からは版元同士の熾烈しれつな競争の様子も垣間見られるのです。

現代、著名な芸能人が亡くなるとテレビや新聞等で伝えられますが、江戸時代には死絵がその役割を果たしていました。今回ご寄贈いただいた作品からは、浮世絵のメディア性、そしてそれを享受した人たちの姿が浮かび上がります。

(学芸員 洲脇朝佳)



【図4】巻紙(図2の部分拡大図)

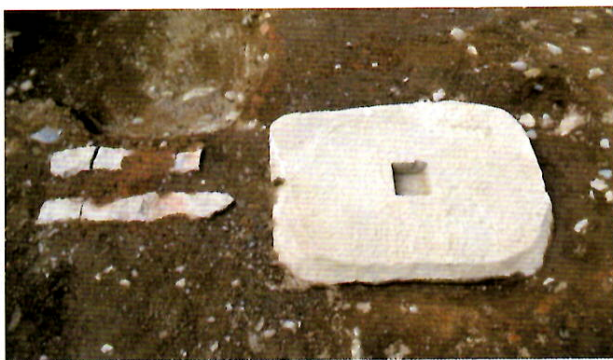


【図5】飾り模様(図2の部分拡大図)

# 江戸城の発掘調査 「天守台脇の門柱礎石」



【写真1】発掘調査の様子 奥側(西側)に天守台を望む(令和元年5月撮影)



【写真2】出土した門柱礎石

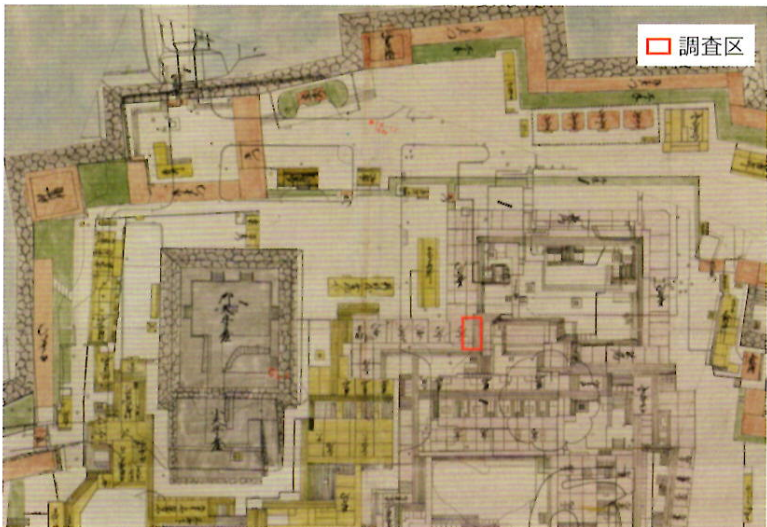
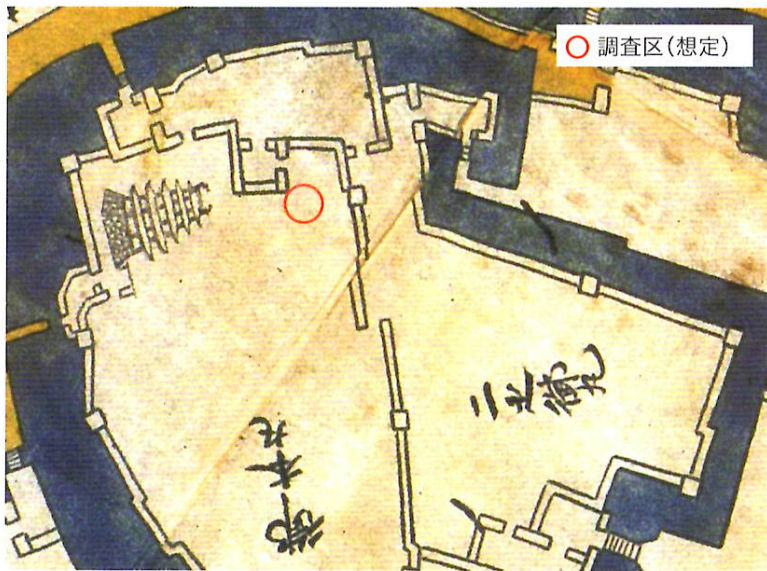


【写真3】出土した遺物(陶磁器類)

千代田区では、区内遺跡の一つとして江戸城の発掘調査を実施しています。城内の中核は皇居となっているため、大規模な開発等が行われることはほとんどありませんが、それでも、開発に伴って遺跡が発見されることがあります。特に、元号が令和と改まってからは、皇室の御代替わりのための整備などが各所で実施されており、いくつかの新たな発掘成果が挙げられています。

このうち、令和元年5月に実施した皇居東御苑災害用マンホールトイレ設置工事【写真1】では、本丸・天守台のすぐ東隣で発掘調査を行い、明暦の大火(1657年)の火災を整理した痕跡を見つけることが出来ました。火災の痕跡は、焼土や被熱した遺物として残されることがありますが、この地点でも赤く焼けた焼土が盛土の中から確認されています。本丸では、これまでも汐見多聞櫓台石垣地点の発掘調査などで、同じような盛土が見つかっており、17世紀初めの本丸完成の時期の生活面よりも高い位置に17世紀後半以降の生活面が作り直されたことが明らかになってきました。

さらに興味深い遺構として、この焼土を含んだ盛土の層から門柱を据えたものとみられる礎石が見つかっています【写真2】。礎石の中央には、ホゾ穴と呼ばれる12cm四方の正方形の穴が穿たれており、その周囲には60cm×30cmの範囲で金属片が付着していました。礎



【上:図1】「寛永江戸全図」での調査位置(白杵市教育委員会所蔵)  
 【下:図2】「江戸城御本丸御表御中奥御大奥総絵図」での調査位置  
 (東京都立中央図書館所蔵)

石の西側には2条の切り石が並んでいることなどからすると、南北に通行するための門のうち、東方の門扉の付け根に据えられていた礎石の可能性が考えられます。門の大きさは想像するよりほかありませんが、中ノ門などの城門よりもホゾ穴が小さいことなどを考えると御殿内の門と考えられます。また、門がつけられた時期は、盛土層との関係から推定すると明暦の大火直後ということになります。

礎石の出土した地点は本丸内の大奥に位置しており、明暦の大火前後でレイアウトが大きく変更された場所の一つに当たっています。絵図で見比べると、大火以前には調査区より北側の北桔橋門きたはねしから続く一帯に塀ますがたや枡形門ますがたが描かれており、本丸防御のための曲輪まがらみがあったことが読み取れます【図1】。これに対して大火後の屋敷絵図では、少なくとも枡形門が存在せず、大奥の御殿が広がっている様子が描かれています【図2】。つまり、出土した礎石から想像される門は、防御的空間から御殿空間へと変貌する過程の中でつけられた門であったことが考えられます。

今回の発掘調査は、限られた狭い面積の調査であったため、門の性格やいつ頃まで使われたものかといったことについて、はっきりとした所見は得ることが出来ませんでした。本丸の変遷を物語る遺構の一つが新たに発見できたと言えるかもしれません。

(学芸員 相場峻)

## 見学ガイド

江戸城本丸一帯は、皇居東御苑として一般公開されています。門や石垣を間近に見ることが出来る施設です。春の行楽に、ぜひお立ち寄りください。

### 【江戸城本丸】

東京メトロ東西線 竹橋駅下車1a口より西へ5分  
 皇居東御苑 北桔橋門から入場(大手門、平川門からも入場できます)  
 宮内庁管理の施設です。休園日等もございますので、お越しの際は必ず下記ホームページなどをご確認ください。

<https://www.kunaicho.go.jp/event/higashigyoen/higashigyoen.html>



【写真4】移設された門柱礎石

(宮内庁の協力のもと出土位置付近に移設していますが、東御苑の見学コースからは外れています。お立ち寄りをご遠慮ください。)

